週刊ダイヤモンド　書林探索
北村行伸
平成 20 年 11 月 25 日号

「早稲田と慶応―名門私大の栄光と影」

橘木俊詔（著）
講談社現代新書　2008年9月20日刊

本書は所得格差や資産格差の拡大を憂慮するリベラル派の代表的経済学者が、私立大学の雄、早稲田と慶応を第三者の視点から論じたユニークな読み物である。この2大学に限らず、明治維新後の日本の大学の創立の経緯や将来像に関しても論考が及んでおり、教育に関心のある方は是非お読みになることを勧めたい。

著者の主張は次のようにまとめることが出来る。（1）早慶が近年存在感を高め、一流国立大学に肩を並べ、一部それを凌駕するようになってきた。その理由は、国立私立の差を縮小させた各種の大学改革にある。（2）早稲田からは「個性」豊かな人材が政治家、マスコミ、文壇などの分野で大活躍をしているが、現在の拡張化路線によってきめ細かい教育が受けられず、同窓意識も希薄になる恐れがある。（3）慶応は早稲田ほどのマンモス化は目指さず、むしろ幼稚舎からの一環教育に特色をおき、卒業後も三田会を通して「社中協力」という緊密なネットワークを形成していること。そして、階層固定化社会の象徴的存在になりつつある。（4）早慶とも研究水準ではまだ一流国立大学との間には差がある。

これらの指摘はもっともであるが、いくつかの議論が抜け落ちているのではないだろうか。第1に早慶の卒業生の中にはリストラや倒産に巻き込まれて、かなり厳しい経験をしている卒業生達も多い。彼らの声は成功した卒業生達とは別のものになるだろう。その影の部分を著者はどう評価するのだろうか。第2に慶応は政治家2世3世を多く輩出しており、現在もその傾向が続いていると議論されているが、3世4世の現在および将来の政治家の出身大学は遙かに分散しているのではないだろうか。政治家の世襲を決めているのは後援会を中心とした地盤であり、むしろそのような世襲を当然のように思ってきた世代は早慶に入るのは難しくなっている。第3に早慶は英米の超一流大学に追いつくことを目標にはするだろうが、日本社会が国際化し、世界中の最優秀の学生を引きつけるような魅力ある社会基盤を揃えない限り、早慶だけの努力では実現できるものではないだろう。